

花のいのちはみじかくて  
苦しきことのみ多かれど  
風も吹くなり 雲も光るなり……

……帳尻っちゅうことなんですやろねえ。

# 夢 殿

秋

涙

令

和

六

年

版

飛  
鳥  
世  
一  
作

一枚だけでいいんだ。魂が震える画を持とう。

自分だけがわかる画を……。そこが始まりだ。



# 目次

はじめに . . . . .	1
夢殿『秋涙』令和六年版 . . . . .	3
本編	



## はじめに

夢殿を触媒とした作品はこの令和六年版を含めると五作目となる。

ここパブーでは単独作品として仕上げたものはこの 夢殿『秋涙』令和六年版だけとなるだろう。

それぞれの作品に思い入れはあるのだが、云うてみたところで書き手のエゴの始末。そう。成れの果てというのが精一杯のところかもしれぬ。ましてやそう云うものに読者を付き合わせ、読んで頂こうとするのであるからして～どれほど厚かましいのやらかったものではない。

それでも止められぬのである。

ここで書く“止められぬ”とは二つの意味があるのだが、夢殿から離れられないという意味が大きい。一つの信仰のあり様と似るのだろう。

執着であり、凝着という姿勢とは違うものだ。

これと同質の感覚となると、河井寛次郎の白地草花画扁壺があげられ、もう一つは速水御舟作の炎舞となるだろうし、ダ・ヴィンチのサルバトールムンディでありカラヴァッジョのホロフェルネスの首を斬るユディトでありということになる。

これらの芸術家の作品群の何が共通しているのかは筆者が分かっていたら良いことであるからしてここで書くことは無いのだが、それらの作品を触媒として書き上げた小説作品を通じ「世一の世界」を感じて頂くことができれば書き手も浮かばれる。

そしてそれは八十億分の一でいいのである。

十人いようが百人いようが私にとっては凡てが八十億分の一の人たちであることには変わりはない。

さて、夢殿『秋涙』令和六年版。あなたらしく楽しんで頂ければ嬉しい。

令和六年二月一二日

飛鳥世一



## 夢殿『秋涙』 令和六年版

### その一 満と数えのいろは坂

奈良いうところは海がないところでしてなあ……。

高等小学校の二年生…、云うてもわからしまへんやろなあ。せやから歳(とし)のころなら十一、十二歳(さい)ぐらいのことでしたやろか。明治も二十年になった頃合い。お父ちゃんやお母ちゃんにはじめて海を見せてもらいましてんけどな。

お伊勢はんへと参ったときに鳥羽ちゅう宿場に留まりましてんけど、二階建ての宿屋はそれはもうお城か法隆寺さんのご本堂のように立派に見えたものでした。

お父(とう)ちゃんがなあ「お千代チョットこっちにおいで」ほう云うのでお父ちゃんの座ってはる窓辺にゆきますと、それはもう見事な桔梗色した海が一面に広がってましてなあ。

西に傾きかけたお陽さんを浴びはった海がキラキラ～キラキラいうて光ってましてん。



南海の図 愛知県美術館収蔵（2）.png



子供ながらに毎日こんな海が見られる三重のお人たちを羨んだものでした。宿屋の軒先では、わたしよりも年下の子達ですやろなあ、竹で編んだ輪を棒を使って器用に回す輪回しをして遊んでほりましてんけどな、奈良ではこのころ既にブリキの輪がありましてん。せやから輪回しと云えばブリキの輪を回して遊んでいたもので、こんな些細なところでも、ああ～奈良に生まれて良かったと思ったのも、考えてみりゃおかしな話ですやろか。

鉄さんが描かかった画にも仰山(ぎょうさん)、海を描かかったものがありましてんけどな。わたしは鉄さんの海の画を鑑(み)るたびに鳥羽の桔梗色した海やお父ちゃんやお母ちゃんを思い出したものでした。そやったわあ、ああお婆ちゃんに叱られるわあ。あのお婆ちゃんがな、うちとこの柳行李の蓋にな、五合升摺り切り一杯のあずきはんを入れはるところで抱えはって中腰のまま横に傾けながら振ってみせましてんけどな、その音がまた鳥羽の海で聞いた波の音にそっくりでしてん。ザザザザーッ、ザザザザーッちゅうてなあ。お婆ちゃん、なーんも云わんとニコニコしながらわたしの顔だけを見て柳行李の蓋を揺らしてましたなあ。わたしが昼寝におちるまで。お婆ちゃん疲れたんですやろなあ。お座りしたまま柳行李の蓋を抱えて眠るように逝ってほりました。

その鉄さんがこの昭和四十二年春、法隆寺の夢殿さんを描き上げたちゅうことで、法隆寺さんや鉄さんとの縁浅からぬお人達にむけてお披露目の展覧会が行われたのでした。

その画はね、法隆寺の夢殿さんと云われ親しまれてきた八角円堂を描(か)かかったものでした。三重県のお伊勢さんと並び称され、一生に一度ぐらいは参ってみたい日本仏教発祥の地である奈良県は飛鳥地方にご縁起をもつ法隆寺さん。その境内(けいだい)伽藍(がらん)の一つ、夢殿・八角円堂の建設発願者は聖徳太子さんです。

「お太子さま・お太子さん」と親しむのは、何もこの町に住む者に限ったことでは無いようで、毎年、一月の二十日を過ぎた頃でしたか、全国の太子堂を持つお寺さんでは聖徳太子さんをお祀りした太子講が催された様子なども新聞を介して伝わります。お太子さんの寺づくりに由来されるのでしょう。建築建設に携わる会社や職人さん、物作りを生業(なりわい)とする職人さんたちの間では、そろって無病息災、職場安全を祈願しお太子さんの遺構を称える勉強会も受けつがれていたよう。

人々が暮らす上での様々なまつり事を語るうえでも、切っても切り離すことのできないお人であり場所であり…。画は、そんな聖地とも云えそうな法隆寺の夢殿さんを描いたものでした。

実はね、わたしこの画を知ってましてん。いえね、正しく申し上げるのなら描いたお人と描いてはった時期を知ってましてん。だってね描いてはるときに傍で見ていたのですから。

今、こうして目の前で出来上がったこの画を鑑(み)てますとね、それはそれは昨日のこのように鮮明に思い出されてくるほどで…。

めんどくさいことや都合の悪いことは忘れることが出来るようになってきましてんけどな。昨夜の夕餉(ゆうげ)の献立すら忘れていられるのに、この画のことは忘れないのが不思議。

【ああ… もしも忘れてしもうたらどないしよ、寂しいなあ… 寂しいことを忘れてしまえりゃ僅かばかりの余白さんも、随分と生きやすいんやろうけど、中々そうは間屋も下ろしてくれまへん…】だって夢の中まで出てきはるぐらいです。これがほんまの夢殿なんですやろなあ…。

この画を描いてはるお人の姿かたち。下絵を描く鉛筆を走らせる指は、わたしこの神棚さんに灯す蠟燭のようにほっそりと白んで見え、しなやかな指がときには神経質そうに、ときには考えることをやめはったように画紙のうえ繊細であり、大胆でありと運ばれました。あれが下塗りというものなんですやろか、水に薄っすらと色が着いた程度に暈(ぼ)かしはった絵の具を塗る様子を見ますと、とてもこんなに美しい画になるとは想像も出来しまへんでした。

左手のね、人差し指と薬指に挟んだ煙草をたてはりながら、器用に親指や拳固を握った小指の付け根を使いはって下塗りの絵具を延ばしていかはる様子は、うちとこの曾孫のお絵描きと変り映えなく思えたものです。

不染(ふせん)鉄(てつ)作・夢殿 完成披露の展示会がこうして法隆寺さんの本堂で行われ、わたしは幸いにもその完成した画を鑑ることが出来ましてんけどなあ。冥途(めいど)の土産なんていう例えがありますやろ…。どうでっしゃろうなあ。この歳まで逝(い)かせてもらえなかったのも、ご褒美だからこの画を鑑てからにしないで。そう観音さんに云われているようにも思えたもの…。

お陰様で、もうなあんも思い残すことなくお迎えを待つことが出来るようになりましてん。



「お千代姉ちゃん、あんたやっばり来てはったん？ 体の按配(あんばい)はもうええの？ 大事にせにゃ、あかんよ、あら…今日は、松枝(まつえ)さんも一緒なん？ ほな安心やわ良かったねえ」

「はいな、ありがとねえ…お里ちゃんも元気そうやね。きょうは亜由美さんもご一緒な。

まだまだ寒いから、体を冷やさんといてねえ…。お腹のお子にさわったらあかんから」

隣町の古道具屋 (ふるどうぐや) の古女将 (ふるおかみ)、お里も来ていたようです。高々二つほど若いかぞえで九十二才というだけでこの云いよう。大体あんた…「やっぱり」ってなんですか。誰殿彼殿 (だれでんかれでん) チョイと名の知れたお人と見ると全部自分のお友達にせにゃ気のすまん子でしてなあ。

まったくいつまで人のこと姉ちゃん呼ばわりしてはるねん。云うところで目くそさんが鼻くそさんを笑うようなもの。他人様 (よそさま) の心配はさておき、あんたとこの嫁や孫嫁の痲癩 (かんしゃく) 取りしてあげなはれや。お前さんが未だに商売にも口を出すものだから、嫁も付き添いの孫嫁も痲癩が溜まっていると愚痴をこぼしているのも評判やないの…。

そんなことを考えていますとね、まるで見透かしたようにお里のところの孫嫁は始末が悪そうに会釈だけを見せました。うちの松枝がお里の孫嫁と言葉を交わしはじめた頃合い「ほれ、行くよ」と催促するとスタスタと一人で歩いてゆきます。

ほんまになあ、子供のころからのことやから今さら驚くことでもないねんけどな、このお里の足腰の丈夫さと口の達者さには舌を巻いたものでした。道具屋は、目が利いては商売にならぬの例えがありますけどなあ、ほんまに上手を云うたもの。

そうそう、むかーしこんな話がありましてんけどな…。

【うちのお店に古着を持ち込んだご近所はんがいはってね、これでなんとか五十銭貸してくれと云わはります。その様子は当時十一、十二歳の私でも分かるほど、何かいつもより居丈高 (いたけだか) に映りましてん。

あのな、質草 (しちぐさ) もって質屋に行くときちゅうのはな、大かたのお客はんは少しこう… 肩をすばめて暖簾 (のれん) をくぐるのが当たり前の風景でしたから、子供ながらにこの人は何をこんなに威張っているのだろうと思ったもの。

店番の母はそんなには貸せない。これぐらいで持ってお行きなさい… そういうのですが頑として引き下がりません。母は何かの事情や理由があるのだと思わはったのでしょう、なんでそんなに自信があるのか、どう見てもそこの呉服屋さんの店先もの。そう詰めたのですが…、するとそのお客はんが云わはりましてん。

「ちゃうがなあ。向こう町の古道具屋の前を通りかかったらな、あっこのおちびちゃんお里いうたかいな、ほれが店先に出とってな、偉いなあお手伝いかい云うたら、おっちゃん… この服な買うてって損はないで云いよる。わしが、なんでや? そんなアホなことあるかいな云うたらな、あのチンマイ躰 (からだ) でチョットこっち来いと手招きしよる。ほしたらわしの耳元にお参りするようになん手を重ねてコチョコチョ云いはじめたやないかい。

あんな…なんでかいうたらな、買うてまたそれを売ったらええねん。お千代姉ちゃんのとこやったら、キッチリ値打ち通りにみてくれはるやんか。おっちゃんは買うて損するどころか儲けがでるちゅう仕組みやねんな〜。そう云いよる。これまたハシコイ子やないのよお…。あの年で男衆の急所の掴み方すら心得てけつかる。末恐ろしいガキやでほんま。せやから買うた値段以上で預かってもらわにゃ、わしゃ損するがな。こんなん持って帰ったところで一人もんのわしにどうせちゅう話しやねん」

なんと売り付けたのはお里だったようです。お客はんはお里のその口上の余りの巧みさと、人たらしの術中にはまってしまったんですやろなあ。

この時、確かお里は満で九つか十ぐらいだったはずです。わたしはお里の逞(たくま)しさに驚き、なんとという利発な子だろうと思ったのもあたり前、末恐ろしくさえ思ったものでした。ただ母は違ったようです。この話を聞くや否や、持って帰るかお店の言い値で置いてゆくか、さあ、どっちになさいます…と畳みかけたのでした。

お客はんはその剣幕に驚きはったんですやろなあ、渋々母の言い値で預けてお帰りになりはりましたん。右手でこゝ暖簾をパシッと叩(はた)き、肩をすぼめ、右よし、左よしと出ていかはった姿は来た時とは対照的に映りましてん。

母は預かった質草を前にすると大切そうにブラシを当て綺麗に折りたたみ、虫よけのショウノウを挟むと飴色に艶をみせる大きな柳行李(やなぎこうり)に仕舞いながらこういうのでした。

「この箱はね、預かりものやけど…多分引き取りには来ない人たちのものだからね、将来、お千代にあげるからね…」と。その行李の横腹には、十二月十二日火の用心と墨で書かれた短冊がボロボロになりながら張り付いてましてん…。

お母(かあ)はん、あんなあ…、あのおっちゃんがお里ちゃんから買(こ)うたと分かったとき、お母はん怒りはったやろ。なんで怒ったん？ わたしがそう云いますと母は…「お千代な覚えておくんやで、お商売でもそうやし友達関係や人間関係、この世の関わりの凡てはな、善敗己に由るいいましてな自分で自分の人生の責任を取らないとあきまへん。他人様を巻き込んで責任を擦り付けるようなことをしてはあかんのや。ほしたらな、お客はんとの間で何か行き違いがあって喧嘩になっても当人同士で解決できますやろう？ でもな、他人様を巻き込むと問題はどんどん複雑に大きゅうなってゆく。因果応報やねえ。あのお客はんはきっとお里ちゃんどこに文句を云いに行かはるやろなあ…、話がちゃうやないかい云うて…。それとな何度も口を酸っぱくして云うてるけどな、うちとこのお商売は口の固さが何よりも大切なんや。お千代は毎日ご飯を食べはりますなあ。ええか、ご飯の半分は口の固さのお陰やと思うとくんやで。質屋の暖簾をくぐるお客はんてな、好きでくぐるお人はいてしまへん。みんな大なり小なりの事情を抱えてくぐりはるねん。前にも教えましたやろ。道端でお客はんにも会っても、うちらから挨拶はした

らアカンて。お千代はなんでか覚えてはる？ そや、うちとこのお商売はな“顔サシ”まんのや。せやからお客はんに迷惑かからんようにわざとに知らん振りせにゃあならんねん。お里ちゃんはな、確かにはしこい子なんやろな。でもな、お利口さんかどうかは分からんな。】 そう云いながら笑って見せたものでした】

何ですやろな。そんなことを想うと知らぬうちに懐かしくて頬と口元が緩みますねんな。それにしても…お里の内緒話は昔から手をこうして合わせはってからお参りするようには、耳元に近づけ、キュッとこう菱餅さんのようにするのが癖でしたな。

せやけど… わたしに内緒話をしたことは、あんた…一度も無かったわな。



「お義母(かあ)さん、しんどいことあらしまへんか。少し座って休みはったらどうですか？」 次男の嫁の松枝がわたしの手を取りながら声かけてくれます。

「うん。大丈夫よ。もう少しだけお前の体を掴(つか)ませたってな…、もうちょっと鑑ていたいから…」

「はいはい、じゃあここの腰のベルトの処を掴んで下さいな…」 コートの裾をまくり上げると松枝は、むき出しになったベルトにわたしの手を掴んで導くのでした。

わたしと歩く松枝は踵(かかと)の高い靴を履く処を見たことはありません。いつも、踏ん張りの利きそうなペタンコの靴ばかり。そして立つときはお相撲さんのように股を開いて踏ん張るのです。その姿は、新婚旅行で行った高知桂浜の土佐犬(とさいぬ)さんの土俵入りのようでしたから、掴まらしてもろてるわたしは、随分可笑しいやら申し訳ないやらの思いで眺めるのが常でした。

「松枝はん、あんた幾つになりはったん？」

「何ですの急に」松枝はそういうと口に手を当てながらワッハハと大笑い。

人目も憚らずという言葉がありますやろ。わたしは松枝のチョイと後ろから手綱(たづな・ベルト)を掴んでいましたから、傍(はた)から見ればそれはさぞかし面妖な光景でしたやろな。わたし達の横を通り過ぎていかはる招待客の皆はなが、その光景を眺めニコニコしながら頭を下げていかはります。

わたしは松枝の手綱を握ったままそれをグイグイと左右に振り、声を潜めて「チョット、松枝はん、笑い声が大きんどちゃうの、もう少し声を落とすなはれ。みんな見ていかはるから」

通り過ぎてゆくお人の殆どが顔馴染みいますかお知り合いみたいな方たちばかり。中には心やすくお声を掛けていかはるお人もいてはりました。会場のあちらこちらでお辞儀が大流行りです。

画を愛でる会ですから言うまでもなくみんなお喋りは小声です。

そこに土佐犬さんよろしく踏ん張りをきかせた松枝。後ろから手綱を引き締めた強力

(ごうりき)のわたし。手綱(たづな)を横に振る姿はまるで犬を落ち着かせるための仕草にも見えたかもしれまへん。

「お義母(かあ)さん… あんまり横に振るとお腹の皮が擦れて痛いすやん」というと口を尖らせ斜めうしろのわたしを見ました。すると、また嘔き出して笑いはじめたのです。余程、わたしの顔が恥ずかしそうにしていたのですやろなあ「はいはい、ごめんごめん」というと、松枝は正面に向き直り「ちょっと前に六十三になりました… あっ、満でね、満で」というのでした。「ほな、数えていうたら…」わたしがそこまでいうと、松枝は「はいはい、六十五です」と先にまわっていうのです。

「お義母さんのその癖は治りしまへんなあ…」松枝は優しそうな笑顔を見せると振り返りながらそういうのでした。

「せやなあ… 以前なら自分の歳いうときは満でしかいわんかったけど、人の歳聞いたあとは必ず満か数えか確認するものなあ…」

「そうそう… でもね、その気持ち、わたしも分かるようになってきましたわ」

「そうですやろう… そうなってきましたねんで… わたし、観音さんにも歳聞くとと思うわ…」

「お義母さんのことやから、きっと、数えて教えてやって云いはるんでしようなあ…」松枝はそういうと首をすくめてみせるのでした。

「ところでお義母さん。お義母さんは幾つになりましたん？」

「松枝はん、あんたまたわたしのボケ具合を確認してまんのかいな。わたしに歳訊くちゅうのはな観音さんに歳訊くことと一緒にやて教えましたやろ。人に云うたら値打ちがのうなりますねん」

「安心やわあ〜」「何が安心やの……」

「だってなあ、お義母さんちゃんと毎度同じ返事をしてくれはりますやろ。わたしにとってはこれほど安心なことがありますかいな。お義母はんはまだまだ元気や。ここ、しっかり掴まっといてくださいねえ」そう云うと、湯タンポはんみたいに温かな手をわたしの手に重ねてくるのでした。

次男の雄介は四十八歳の年(とし)に労咳(ろうがい)を患い早逝。二十歳の長男を頭(かしら)に十七歳の次男、十五歳の長女と残したままに鬼籍に記されましてん。親より先に逝くとはなんと親不孝… そうも思ったものです。せやけど一番しんどい思いをしてたのは嫁の松枝ですやろなあ。

子供三人を抱えて松枝も悩んだ時期もあったようで、しばらくは夜になると一人泣きしていたのでしょ、朝には泣き腫らした目を伏せながら、子供たちの準備をする姿が見られたものでした。突然残されまるで放り出されたように、何から何まで自分でやらなければならなくなりました。家業の質屋は早逝した雄介が継いでくれていましたから、松枝は嫁に嫁いできていたものの雄介が他界したあとは心細かったんですやろう。しばらくはかける言葉にも苦慮したもの。

それでも孫三人も、今ではみんな立派な釜戸持(かまどもち)。その中の長女が家に残り、入り婿を取ってくれたのでした。

そんなわたしもなあ、早くに戦争で良人(おっと)を盗られてましたから松枝の寂しい気持ちや大変さは痛いほどわかったものでした。

あのなあ…誰が云うたか知りまへんけどな、ももひぎ三年しり八年云うてねえ、女子(おなご)ちゅうもんはな、後家はんになってからも腿や膝に旦那の温もりを思い出しながら泣く日々は三年にもおよぶそうでしたな、尻にあっては忘れるまでには八年もの時間が必要やちゅうんねんから、そりゃあ松枝も寂しかったですやろうなあ。さっさと十八年も経ってくれたらこっちのもんなんやろけど。割れ鍋にも綴じ蓋いうて、どんな鍋にもそれなりの蓋はあった方がいろいろ都合も宜しいんやろけど。自分たちの家の中で男はんに先立たれ、残された者を見るちゅうのんは不憫でかないしまへん。

それにしても昔の人はえらい粋なことを云うたものでしたなあ。でもな、ももひぎ三年しり八年てな、きっと考えはったんは男はんなんやろねえ。これまた女子(おなご)の業ちゅうもんをキッチリ知ってはったら、こんな三年だ八年だなんて云えますかいな。ねえ……観音はん、堪忍したってやあ。

## その二 錫(すず)メッキのブリキ缶

この画を眺めているとねえ、描いてはった情景までも思い浮かべることが出来ますねん。

それは去年の秋のこと… 昭和四一年の九月も半ばを過ぎた頃…。

毎年のことやけどなあ、斑鳩の地を濡らす秋の長雨は夢殿さんを臙(おぼろ)の中に包み込みますねん。伽藍周辺さえもけぶるようにうつります。

境内に敷き詰められた玉石は水にふやかした黒豆さんの様子を見せながら、伽藍の一部になったようにピクリともしまへん。涅槃色(くりいろ)云うんですやろか。

中秋の柔らかな陽ざしさえあれば、白地に薄く藍を溶かし込んだ石の姿は訪れる参詣者の足元に心地よい旋律を奏で響かせるに一役買ったことでしたやろう。

さながら天と地が繋がった合図を想わせるようで、雨をおとすお空も同じ色を見せています。それは黒豆さんをふやかした後の水で塗りつぶしたようですねん。

太く、切れ目なく墮ちる雨垂れは、吉野の平宗(ひらむね)さんの葛(くず)きりをお空から突き出したように見え、それは救世観音菩薩の功德の顕しのようにも思へ、数多(あまた)患(わづらいごと)からの救済を試みる蜘蛛の糸にも見えるようで、時には下から上へ降っているようでもあり、昇ってゆくようでもありと映ったものでした。

まるで足元から踏み板を外されたようで心細く頼りなくも感じられましてん。

「お千代。さて、この先どうする。進んでみるもよし、退いてみるもよし」と突きつけられてもいるようで、些かハッとさせられたものでした。

【ああ… 何でしょう、思い出したら平宗さんの葛きりが食べたくなくなってきましたよ。こんな歳になっても食べたいは衰え知らぬものなんですよやろか。ああ… 今夜の夕餉は平宗さんの柿の葉寿司にしましょうか。松枝と帰りに買ってゆきましょうか… 】

わたしが法隆寺さんにお参りに来るようになってから幾度の秋を迎え送ったことですよ。秋雨に眺め入ると現(うつつ)と夢を行き来するようで些(いささ)か心もとないねんなあ。

地面から浮かび上がった雨水が境内に敷かれた玉石の隙間を埋めてます。雨は間断なく木立や伽藍、地を打つものの、境内を取り巻く仏性が幸いしてるのでしよう静寂に馴染みを見せてはります。

今また一人の老男がいつもの様に長靴を履き、纏わり(まとわり)憑く(つく)雨水すら慈しむように足を小さく出しながら伽藍むこうへやってきました。

この御仁、名を不染鉄というそうで、どうやら画描(えかき)を生業(なりわい)とするのか、足しげく通い来ては法隆寺さんや夢殿さんの画を描いてはったようです。境内で顔を合わせるようになってから既に四十年も経ちましたか。毎日毎日、雨の日も風の日も片道一里半(6キロ)の道のりを歩いて通(かよ)ってはったようです。

鉄さんは足元に目をやるや、足でそっと玉石を転がしながら弄(もてあそび)はじめました。

コロ、コロ、カチン、転げた玉石はぶつかり合いながら明後日(あさって)の方角に転げてゆきます。何やら生きてるようでもあり、あらぬ方向へと転げる様子は人の一生を見せられているようにも思えたものです。

雨の中、傘を持つ手が足の動きに呼応をみせ、時折大きく右へ左へと揺れをみせはります。踊っているようにも見え、踊らされているようにも見えましてん。その姿が寂しそうでなあ。きっと鉄さんは秋が好きなんやろうなあ。人目を気にせず存分に泣けるから秋の雨模様が好きなんやろなあ…。そう思ったものでした。

でもなあ、不思議なお人でなあ、境内を歩くときは傘のかかる範囲にしか足を運ばず、静かに歩きはるんやけどな、手を合わせるわけでもなく。お勤めをするでもない、ましてや何かを願うわけでもなく。ただひたすらと傘を手に地面に目を落とし、むこうに佇みはってねえ、哭くでもなけりゃ憤るわけでもなく、粗忽を見せるわけでもない。それが按配寂しそうで寂しそうでなあ…。

中にはな、博打にでも行くんですやろなあ、何人かで連れ立って来ては賽銭箱に乱暴に賽銭を放らはって柏手を打つ埒(らち)なき男衆も見ることが出来ましたからなあ…。



しばらく見かけぬなと思へば、長野に行っていたと善行寺土産を私とこのお店まで届けてくれる心優しきお人でした…。わたしが数年前に大病を患ってからというもの、顔を合わせるたびにわたしを気遣い声をかけてくれるのですが、どうにもわたしよりも鉄さんの方が儂(はかな)げな按配を感じさせたものでした。

聞く処によると、東京小石川(現在の文京区)にある浄土宗の寺、光円寺の住職の倅ということではあったものの、そのくせ背筋のシャンとしたところは覗えず、とても仏の道と近いとは思えませんでしたな。

ところが人は見てくれではわからないもの。話は聞いてみなければわからぬもの。なんでも昭和のはじめ頃には僧侶になるための検定試験である律師なる試験も修めていると聞かされたのには随分驚かされたものでした。

第二次大戦後の混乱期には女学校の校長も務めていたようで、とき折地元の女学生数名を従えてお参りする姿を見受けたものの、境内でわたしを見つけた途端、その気配引率からは甚だ遠く俯き加減に歩く様子からは引率されている気恥ずかしさが滲んで見えたものでした。

「よう降りますなあ…」

「はい。本当に…」

どうということもない当たり前の挨拶が毎度のこと交わされます。

鉄さんは風呂敷包を開くと道具箱を取り出し、雨のかからないところにイーゼルを立てます。そこに古新聞で何重にも挟み込んだ画紙を置くと画を描き始めました。

粗末な空き缶を降りしきる雨の下に何個か並べますと、立ちどころに仏性がかき消され缶を打ち付ける雨音が広がります。缶の大きさがそれぞれ違うせいなんですやろなあ。凡ての缶から流れる音が違いましてな。それはまるで声明(しょうみょう)のように境内に響いたものでした。

【あ…、かき消されたと思った仏さんの声は姿を変えはっただけなんやろか。缶を打つ雨音さえ愛おしく思えるのは、観音さんの成せる御業(みわざ)なんですやろなあ…】  
目を閉じてその音を聞いてますとな、水琴窟いうのがありますやろ。井戸のような蹲踞(つくばい)の小さな隙間に耳を寄せますと、一滴、一滴おちる水滴が仏さんの内緒話を聞いている様に心落ち着く音が優しく響きます。お里の内緒話もお人によっては水琴窟みたいなもんかもしれまへんなあ…。

カン、キン、コン、カチャ、ヒチャ…缶の中に水がほどほど溜まりだすと音が止みはじめます。

雨のかからない庇(ひさし)の張り出した下、鉄さんは夢殿を描いてはりました。  
「いやあ… これはやはり描きにくいなあ… カンバスが湿気を吸って鉛筆が走らない」  
誰に云うとは無く鉄さんが肩を落として呟きます。

「下色だけ入れておくとするか…」

雨を受けていた空き缶を軒下に運び込むと、三十分も経っていないのに一番小さな缶には水が溢れんばかりに溜まってはりました。

「随分溜まりはったね… お水…」

「そうですねえ。チョット薄めすぎですが、まあ、下塗りなのでやれるでしょう」

鉄さんがはにかんだ笑顔を見せ答えます。

「あら、鉄さん、絵の具は入れしまへんの？」鉄さんは四つの缶にそれぞれ絵筆を放り込むと、グルグル水をかき混ぜてはったのです。

「荷物になるし雨が降っていますからね、絵の具チューブをダメにしては大変なので、予め缶の中に絵の具を塗りつけて乾かしておいたんですよ」

水がたまった四つの缶は、一つの缶を除いてどれも同じように黒豆さんをふやかした水のように薄黒く見えているのです。

「歳のせいやろか、目も弱わなってどれも同じ色に見えるんやけど、鉄さんに違いはわかりはるの？」

鉄さんはニコリとすると、缶の側面を指さし「ほら、お千代さん、ここ見えますか？」と云いました。

杖を頼りにチョイと前屈みになり眺め観ますと、缶の側面は「赤」「黒」「青」「白」と、釘か何かの鋭利なもので彫られているのが判りました。

銀色の缶の肌が少し錆びつき、所々茶色くザラついて見えてましな。そこに傷つけられたところだけがピカピカと金彩を放って観えました。

「鉄さん… ごめんなさいね、うるさくて。白っぽいお水は缶の横腹に白って彫ってありますけど、これも下塗りに使いはるの？」

「使いますよ…今日は雨が強いですから画紙が湿気を吸っているので判り難いですが…

半乾きの処にポツポツと白を置くと滲(にじ)みや暈(ぼか)しが花火のように広がるんです」

鉄さんは嫌な顔を一つも見せず、この歳よりの質問に機嫌よく答えてくれるのでした。

「なんだか綺麗ですねえ… 缶の彫ったところだけがピカピカ光ってありますねえ…」

「今では珍しくなりましたからね、錫(すず)メッキのブリキの缶は…」

「錫メッキのブリキ缶ですか… そんなものがあるの…」

そこまで云ってわたしは思い出しましたよ…わたしは錫メッキを知っていたのです…。



わたしが十三、四のころでしたか、その日の店番は祖母のウネがしてましてな。

「お千代、茶の間の戸棚の上から二番目の引き出しを開けておくれ…そうそう、そこを開けるとね銕なんかがあるだろ？」

祖母の云う通りに戸棚を開けると、そこには裁縫道具の針や糸、そして銕やら箆手などが几帳面に整然となおされていました。

「そこに針が引付いた、まあい平べったい石みたいなものがあるかい？」

「うん。ある…」

「その針箱に針を外して入れたらそのまあるいのをこっちに持って来ておくれ」

そこには確かに針が引っ付いたまま散らばることのない、まあるい平べったい石のような物がありました。

針を外しお店の祖母のもとへ持ってゆくと、西洋風の立派な身なりをし口ひげをたくわえたおじさんが立ってはりました。

「はい、ありがとさん…」

わたしは何が始まるのかと好奇心が抑えられず、店の番頭席を離れることが出来ずに祖母の手元を正座をしながら凝視するのです。

ふと目をお客さんのひざ元の上がり框(あがりかまち)に移すと、そこには綺麗に銀色に輝く「茶道具一式」が整然と並べられていました。

【綺麗… おてんとうさまの光を受けてピカピカ光ってはるわぁ】

とも箱もあり、筆字で箱書きが書いてあるところを見たわたしは、なにか途轍もないお宝が持ち込まれたと思ったものです。

祖母は平べったいまあるい石の玉を自分の前に置くと、急須を手に取りそのまあるい石のようなものの上にかざしました。

「カチン！」

するとどうでしょう。その平べったい石の玉は急須に飛びつくように張り付いたのです。

「あちゃあああ… あかんかあ…」

「あきまへんかあ…」

声を発したのは祖母とおじさんが同時でした。

わたしはその光景を見ていて何のことか皆目でした。なにがどうなっているのか、なにがあかんのかが気になって仕方ありませんでした…。せやけどね、そのお客さんの落胆の様子を見ていると、その場で祖母に聞くことが躊躇(ためら)われたのです。

「お千代、これを元あった場所に戻しておいてちょうだい」

その言い方からは、戻したらお店には戻ってくるなという調子が感じられました。

程なくすると、お店から呼ぶ声が聞こえてきました。

「お千代、さっきの石の玉を持っておいで…」

「はぁい」わたしはこの瞬間が大好きでしてな、祖母や母はことある毎に新しい知恵を授けてくれました。

「お千代、これはな、磁石云うてな、鉄ととても仲がええねん」

そういうと、先ほどのお客さんが置いていかはった急須に近づけると、それは祖母の指先から飛び出すように急須に張り付いたのです。

「お婆ちゃん、うちもやってみたい…」

「よしよし、ほなな、こうして下に置いて…こうして急須を近づけてみなはれ」

祖母は質草に傷がつくことを懸念したのでしょう。急須の底をかざすことしか許してはくれまへんでした。

「…せやけどな、この磁石っちゅうもんはな、値打ちの高いもんととの相性は良くないねん。せやから金や銀との相性は今一つちゅうこっちゃな…。ほれ、そこからその簪(かんざし)を持って来てごらん、幾つか並んでる箱がありますやろ…そうそう、それをここへ…」

箱を祖母の前に届けると、祖母はその磁石というものを簪の上にかざしはじめました。

「これは銀やな… これは鉄、これはええもんやねえ…金細工や…」

そう云いながら磁石をかざして真贋の見立てを教えてくださいました。

「さっきのお客さんのこれはなんやの？ 磁石が引っ付いたちゅうことは鉄なんやろ？ なんでこんなにピカピカ光って綺麗なん？」

「錫(すず)メッキいうてな、鉄の上から錫でメッキをかけてはるねん…せやから、磁石が吸いついてしまうたんやな…」

祖母はそういうと簪の並んでいる箱から金細工の施された簪を取ると、わたしの潰し島田に足りない結髪(ゆいがみ)に刺しながら「お千代な覚えておきなはれや。人の相性云うもんはな、得てして磁石みたいなもんと思うて惹きつけられるもんを有難く思いがちやけどな、そうやないで…結局は目を養わなあかん。澄んだ目をもちなはれや…。お千代が金や銀のように値打ちの高い人間になれば、磁石は寄ってきいへんから安心やけどな…」そう言いながら優しく笑うのでした。

あの簪が祖母の形見となるまでに、それほど時間はかかりませんでしたなあ。

あら…鉄さん…そういうたらあんたも鉄やないの、ほな、わたしが磁石かい？ あんたが引き寄せられるんだか、わたしが引き寄せられるんだか…どちらにしても引っ付きたがるんやろなあ…あんたもわたしも大事な人を早くに見送ってるから…なんや他人ごとちゃうねんやろなあ…きっと…。

### その三 鉄さんの憂鬱

「お義母さん、大丈夫ですか？ しんどいんじゃないですか？ 無理しんと休んでくださいねえ」嫁の松枝がよう面倒みてくれはりましてえ、わたしもこうして鉄さんの描いた画を眺めに來ることができまして。それはもう本当に有難いことですわ。

「松枝はん、ゴメンねえ… いつもこうして掴まらしてもろて。あんた大丈夫か？ 重たいことあらしまへんか？」

「何いうてますのん。手綱引いてもろてるだけですやんか。な一んもしんどいことありません。あっ、お義母さん、いい席が空きましたで～ あそこに座って眺めさしてもらいましょ」

不思議なものです。こういう時は足がこう…シャシャシャシャいうて動きますねん。

丁度画の正面。少し距離はありましたけど、座って鑑ることが出来るベンチシートが空きました。

「あ～ これはいい按配だねえ。これで少しは落ち着いて鑑られそうやねえ」 そういいながら松枝を眺め観ると、わたしが掴まっていた腰回りのゴタゴタを直してはりました。

鉄さんの描かかった夢殿さんは、秋の長雨の中に佇む夢殿さんを描かかったものなんやけどね、太～い雨が幾筋も幾筋も画面いっぱい垂れ落ちてましてなあ… それが按配寂しそうに見えるのです。ただね、扉障子にほんの少しだけ中からの明かりが挿してましてな、その明かりがそりゃ可愛らしゅうて、可愛らしゅうて…。

「あぁ… あの明かりは鉄さんの魂なんやろなあ… 早くに奥さんなくしはって、寂しい気持ちを顕した鉄さんの魂なんやろなあ」 そう思えたものでした。

夢殿さんの南の空には雲を割るように横一条の光明が射してましてな、それがまた打ち立ての真綿のように柔らかでやさしい光でした。

「松枝はん… いい画やねえ～私この画を鑑ているとなんか泣けてきますわ。ねえ？」

「お義母さんは鉄さん鼻唄やからねえ～ わたしなんかこの画を観てると葛きり思い出しましてん(笑) はあ… なんや葛きり食べとうなってますわ」

わたしは吃驚しましたよ。この子に読まれたんちゃうやろか思うて。

「松枝はん… あんたなあ… 似てきはったねえ～」

「誰にですのん？」

「わたしにやないの、わたしもなさっき平宗さんの葛きり思い出しましてん…」

「お義母さん…ほな、帰りに食べて帰りましょ。晩ごはんに柿の葉寿司をこうて帰りましょ…」

長いこと一つ屋根の下、苦楽を共にして来たお蔭でしょうか、観音さんの粹なお計らいでしょうか。考えることは寸分違わずを思わせませす。

「そうそう… たしか家に鉄さんの画が一枚だけありましたなあ…、富士山を描かかった立派な画。お義母さんあの画はどこに直しましたん？」もう二十年以上前に鉄さんからわたしが買った画のことを松枝は思い出したようです。

「あのな、うちの柳行李わかるか？ そうそう…あの柳行李や。なに云うてますのん、捨てますかいな。お婆ちゃんに祟(たた)られるわ。部屋の押し入れにちゃあんとはいっているから…あんたあ、ちゃんと引き継いだってなあな行李」

「はいはい」ほういうと松枝は私の隣に座りながら足を優しくさすってくれています。

人の手ってな…、なんでこうして温かくて柔らかいんですやろ…。

わたしは孫やらひ孫やらそしてこの松枝やら…、たくさんの温かくて柔らかい手に囲まれて過ごせてますけどな、鉄さんを想うとねえ～ 自分の手しかあらしまへんやろ… なんばお坊様の修業したゆうても、そりゃあここまで寂しかったですやろなあ……。



山海図絵 伊豆の追憶 公財 木下美術館収蔵.png

「ごめん下さい… ごめん下さい」

「はあい… おや、鉄さん。どないしほりましたのこんな寒い日に」

今から二十年以上前… 昭和二十年の師走も半ば。鉄さんがうちの店を訪ねて来ましてん。最初に対応に出たのは早くに逝去した次男の嫁の松枝でした。

「やあ、松枝さん。ご無沙汰してます。面目ない。じつは年末を迎えるに窮してしまい、ついでに画を一枚かたに預かってもらえぬものかと…」

「わかりました。ほな、お義母さん呼びますからチョットだけまってくださいねえ」

松枝が奥のわたしの部屋に来るや早口で仔細を告げるのを聞くと、わたしは「ありがとう」と一言発しお店まで転げるように出てゆきました。シャシャシャシャ…いうてなあ。

「鉄さん、寒いところわざわざ来てくれて有り難う。なんか松枝の話では画を一枚預かって欲しいとか…」取り次いだ松枝は店に顔を出しません。このあたりは本当によくできた嫁でした。

「お千代さん、申し訳ない。恥を忍んでなのですが、この年の瀬、なんとも窮してしまい、無理を承知でお訪ねしました」

さぞや居心地が悪かったのでしょう。鉄さんは正月用に番頭席に飾ったご生花の藜蘆(おもと)に鈴なる実のように顔を赤く染めながらそういうのでした。

「鉄さん… わたしとこのお商売は値打ちがはっきりついているものにしかお貸しすることは出来しまへんね。せやから美術品や工芸品という文化的価値を評価する物差しは恥ずかしながら持ってませんねん。まずそこを許したってくださいねえ」

「そうですかぁ…」鉄さんは肩を落としてはりました。

「でもね鉄さん…、もしも鉄さんが良ければわたしがその画を買わせてもらいましょ」

「ええっ！ 買ってくれるのですか、わたしの画を」

「お友達の画を一枚買うぐらいがなんですか…ちょっと遅いぐらいですわ。はい、ほななんぼで買わせてもろたらええのんやろね」

鉄さんはモジモジしてました。言いにくそうにモジモジと下を向いて。意を決したように一層赤く染めた顔をあげると…

「では、お千代さんの好意に甘えて八百円で…、いや七百円で…」

「珍しいお人やなぁ(笑)」

「はぁ…」

「うちとこ来るお人は皆だんだんに高向(たこう)になっていかはるのに… 鉄さんは安うなつていかはる…そんなお人聞いたことありまへんわ(笑) わかりました。ほな、これで買わせてもらいましょ」

わたしが番頭席の上に用意したお金は「千五百円」でした。これでも高いか安いかわかりません。ただ七百円、八百円はギリギリですやろ。年の瀬を迎えるに窮しての七百円…、ほな新年を迎えるには足らしまへんなぁ。わたしはそう云いながら鉄さんの手に千五百円を握らせました。

「お千代さん…、あなた画をまだ鑑てないではないですか。鑑てからにしては如何ですか」

「鉄さんがお客はんなら勿論みさせてもらいます。せやけど鉄さんはお友達です。わたしはお友達の画を買わせてもろただけ。その風呂敷に包まれた画はあとでゆっくりみさせてもらいます…、松枝は一ん、はいな悪いけどね、あったかーいお茶を一杯いれてここまで持って来てくれるか。ほして、この包みを仏間へ持って置いておいてな…」



「あんなぁお千代。よーく覚えておくんやで。お商売先からものを買うときはな、絶対に値切ったらあかん。びた一文たりとも値切ったらあかん」祖母のうねの教えでしてん。

「でも… みんな闇市で買い物するときに、まけてくれまれてくれっていいはるよね」

「そや。でもな、うちとこのお商売はな逆なんや。もっとくれ、もっと貸してくれ云われるやろ？」

「うん… 皆言うなぁ」

「仏さんが教えてくれる世界にはな、餓鬼道ちゅう世界があつてな、この世界はとにかくもっと、もっと…、もっと、もっというて欲しがる世界でな、もっとまけろ、もっと高く…、それはそれは欲のキリのない世界なんや」

「お婆ちゃん…、うちもなあお母はんはんに時々言うてるわあ…、もっとお飴さん頂戴て…」  
「ほうか…、ほしたらなお千代、お母はんにお飴さんもろたらな、今度はずっと頂戴つて云わんときや。ほしてなお爺ちゃんのところへ行つてな、お飴さん頂戴て云うてみ。きつとお爺ちゃんもくれるから。ほしたらお千代、倍に増えるやろ。お飴さん。ほしたら誰からも小言いわれんですみますやろ」

「ほな、お婆ちゃんにお飴さん頂戴云うたら、うち…、大儲けやね(笑)」

「あかん…、この手はお婆ちゃんには通用しまへん(笑)…」

「ええか、闇市で買うものいうたらな、大概値段ははっきりしてるものが多い。高かろうが安かろうが高々知れたものや。要はお商売先の儲けちゅうこっちゃな。だから値切つたらあかんのや。わたしが値切らずに買い物したらな、お商売先がうちの質屋に来た時に、もっとくれ、もっと出してくれ… 云えんくなるやろ。人様の声いうもんは千里を走るいうてな、ほれがお商売の評判ちゅうもんになるねん。せやからな、まけてくれとは言うべからずが鉄則なんや」

事実、祖母が買い物先でまけてくれという言葉を使ったところは見たことがありませんでしたなあ。逆にうちとこのお店にきはったお客はんは、みな、祖母の顔を見るとあきらめたように自分で金額をいうこともなく、祖母が提示したお金をもって帰りまりました。

昭和二一年正月の松もまだとれぬ頃… 鉄さんからの年賀状が届きましてなあ。ハガキの裏には朗々とした感謝の言葉と共に縁起物の画が微に入り細にわたって描き込まれてました。

「お義母さん、大切に… 画と一緒に直しておきましょうか。将来、もっと値打ちが出るかもしれまへんから(笑)」松枝が楽しそうに言葉にしました。その年から年に二度、鉄さんからのハガキが届くようになりました。わたしが鉄さんの画の秘密に気が付いたのはこのハガキの画を観るようになってからでしたなあ…。

#### その四 鉄さんの秘密

昭和三六年の夏の日でした。この歳の夏はそりゃあ暑い日が続きましたなあ。夏入り前の梅雨が空梅雨でしたから奈良県全域に渇水警報いうもんがでましてな、取水制限いうですやろか、お天道様の高い時間帯になると水道が止まってしまって、そりゃあ往生したものでした。

そんな七月の三十日も間近のころだったと思います。松枝が嬉しそうに声を弾ませてわ



たしの部屋までハガキを届けてくれました。

「お義母さん、鉄さんから暑中見舞いが届きましたよ。また可愛い小さな家がたくさん描かれた絵ハガキ。こんな小さな家をようもこんなにたくさん描きましたなあ、鉄さん」

「ほうかぁ、どれ、松枝はん、ちょっとそこの虫眼鏡取ってくれるか。はい、ありがとさん。どれどれ……、松枝はん……、あんた、これ家か？ わたしには黒ゴマさん潰したようにしか見えしまへんわ。ようまぁこんな小さい家をたくさん描きはったなあ」

「でも、やっぱりあれですねえ〜、本職の画家さんだけあって上手ですねえ」

「ほうかぁ？ ほういうもんかいねえ」

この頃のわたしは目がよく見えなくなっていたこともあり、チョットボケも入ってきていたんでしょなあ、松枝の云うことも分かったような分からぬような、おかしいな按配になってきてましてなあ。

「松枝はん……、悪いけど押し入れから柳行李をだしてくれるか」

「はいはい、行李の中の絵ハガキが入ったお煎餅の箱ですやろ？」

「そうそう、はいありがと」わたしはそう云うと箱を開けて中に直しておいたハガキを出して手に取りました。

手にした虫眼鏡で一枚一枚の絵ハガキを眺めはじめたものでした。するとそばで見ていた松枝が云うのです。

「お義母さん、鉄さんの画って風景とか景色が多いなあ…、まあ、季節の挨拶やから当たり前かもしれへんけど」と。

わたしは云われて改めてまじまじとその絵ハガキを見ました。

わたしはその鉄さんから送られて来た三十枚ほどの絵ハガキを手にしながら泣いてしまっていたのです。

「お義母はん、どうしはったんですか、具合でも悪いんちゃいますの？ あきまへん、チョット横んなりはった方がええんちゃいます？」松枝は一生懸命に気にかけてくれましたな、一生懸命にわたしの背中をさすってくれてましてんけどな…。

「松枝はん……、鉄さんなあ……、寂しいねん。あの人な寂しいんよ……」私はハガキを手にしたままオイオイと泣いてしまっていたのです。

驚いたのは松枝だったでしょう。何も言わずに私の背中をポンポンと優しくはたき、さすってくれていました。

鉄さんからのハガキに描かれた画のすべてにわたしは秘密を見つけたのです。

そりゃぁねえ、普通にご挨拶を交わすだけのご縁のお人でしたらそこまでは感じなかったかもしれまへんなあ。

せやけどね、鉄さんとは仏さんや観音様が取り持ってくれたご縁。わたしがもう少しシャンとしてたら店を松枝に任せたまま鉄さんの面倒を見に転がり込んでたかもしれまへんなあ……。

◆

むかあしむかーしなあ、私が尋常小学校から高等小学校に上がった年でしたから、そう一年生でしたやろか、せやから十歳の時でしたわ…。

「ぐーに一はん〜、ぐーに一はん、お千代のあだ名はぐーに一はん」

ある日を境に、突然降って湧いたようにわたしにあだ名が付けられましてん。最初はわたしにも何のことかわかりしまへんでした。それが毎日毎日、来る日も来る日も云われるようになりましてなあ。

ある日、学校から帰り祖母のウネに「おカァはんは？」と尋ねると買物行ってるいわはりましてなあ、なんか急に寂しいなって祖母の膝に突っ伏して泣いたんですわ。驚いた祖母は「どしたん？ 学校でなんかあったか？」そう優しゅうに聞いてくれました。わたしは泣きながら祖母に聞いたものです。

「おばあちゃん……、あんな、学校でなあ、みんながぐーに一はん、ぐーに一はん云うねん。ぐーに一はんって、なんやろか？…」ほうしますとな、祖母が大きな声で笑い出しましてん。わたしはなんやビックリしてしましましてなあ。

なんや面白い漫談か何かのことかもしれへん思うたぐらいでした。ほうすると祖母は急に真面目な顔になると…。

「いいかお千代、今から云うことよう聞くんやで。これからなあお千代が大きゅうなっくわな、するとな、いろんな知恵がついてくる。ほしてな、周りの人間達からかけられる言葉はもっと厳しゅうなる。言葉が無ければもっと厳しい、そりゃあ恐ろしい態度を取られることもある。ええか、負けたらあかん。せやけどな、おばあちゃんがいう負けたらあかんちゅうのは、喧嘩をせっちゅうこっちゃないで。大人の言葉にな、臍を噛むいうてな、どうにもならない悔しさを顕した言葉があるんや」

「ほぞ？ ほぞってなんやの？」わたしがそう聞きますとなあ、祖母はわたしのお腹のおへそをチョンチョンとつくと「ここやがな、お臍さんや」というのでした。

「お千代、おまえさんは自分で自分のお臍を噛むことが出来ますかな。……そうや、できしまへんやろ。噛めない臍を噛みたくなるほどの悔しい気持ち。それを大人たちは臍を噛む云うてますのんや。でもなあお千代。噛むのは臍やないで。唇や。それもなあんたの心の唇や。うちこのお商売はなあ、お金を借りてくれるお人がお客はんや。ええこと教えてやろか、お千代がなあ、大きゅうなった時にな、必ず、必ず見たことあるお人が、ほれ、あの暖簾をかき分けて入ってくる。必ずや」祖母はそこまでを云うと首だけをしゃくり上げるようにお店の暖簾を見たのでした。

「おばあちゃん、それはうちの知っている人ちゅうこと？」

「そうや。同級生かもしれへん。年下のほれ…、なんちゅうたかいねえ……、せやせやお里ちゃんかい。かもしれへん。どこの誰がいつお客はんになるかもしれへんのや。お千

代…、人間の勝負処云うのはな突然来る。その時のために今は心の唇をグッと噛み締めて色んな知恵を溜めなはれや」そう云うて笑うのでした。

「わかった。わかったけどわからんのがな、ぐーに一はんってのはなんやの？」

「ああ、それは質屋のこっちゃ。むかーしな、質屋云うもんは博打場のすぐそばにあってなあ、博打で負けて借金こさえた人や、もうひと勝負したろおもた人たちが、身ぐるみ預けていったところやったんやなあ。博打場ではな、五という数字をグ云うてな、ほして二は、にのままや。ほしてな、奇数を半、偶数を丁いうて二つのサイコロや花札でな、出た数字の丁半を決めるいう博打があった。五と二を足すと七やろ、質屋の七に通じますやろ。ほして七は半の目になる。せやからグーニーハンなんやなあ……。昔はな、チョイとイカレタ博打うちは、質屋をグニ屋いうて呼んでましたからなあ。にしてもこれまた、こまっしゃくれたガキやなあ」祖母はそういうと声をたてて笑うのでした。

次の日、わたしが学校へ行くといつもの子達が徒党を組んで「ぐーに一はん」とわたしのあだ名を呼ぶのでした。

そこへなあ、いつものは教室でもひとりでおる男の子が現れるやいなや、三人の男の子たちを一瞬でけり倒してしまったのです。

わたしはその光景にあっけにとられ何も言うことが出来ずただ眺めることしかできしまへんでした。

その日の午後の休み時間のことでしたか、わたしが教室に戻ってみると男の子二人が言い合いをしてましてん。言い合いしてる一人は、わたしを助けてくれた男の子でした。もう一人方は町の相談役をしている家の小倅でした。

「偉そうなことぬかすんやったらな、家の家賃払ってからにしてもらおうか」

「お前になんの関係がある！ 親のこっちゃないかい。わしに関係あるかい！」そう言い合っていたのでした。どうやらわたしを助けてくれた男の子の家は窮していたようであり、教室の中でも何となくそんな話は出ていましたが、その話を聞きつけた小倅が朝の仕返しとばかりにみんなのいる前で窮状を暴露してしまったんですなあ。

そうなのです。朝蹴り飛ばされた中にはその小倅も入ってましてん。それからその男の子は教室で一人であることが多かったようで、気になり時折みると、いつも教室の窓のそとに広がる空を眺めてはってねえ…。雨の日も晴れの日もでしたなあ。

あれから二十年が過ぎたころですやろか。暖簾を…、そう、こう肩をすぼませ首を前に突き出してくぐるお客はんがいらっしやいましてなあ。

時計をひとつポンと番頭席にぞんざいに放らはると「二千円貸してくれ」云いはります。品物をみさしてもらいましてな「七百円」しか貸せませんいうと、大きな舌打ちをするとそれでいいわはりましてん。

「ほな、何か名前の分かるもん出してください」わたしが云うて出さはった身分証をみて驚きました。町の顔役・相談役の小倅でしてんなあ。

向こうは知ってか知らずか、わたしの顔など一切みいしまへんでした。お金を渡すと肩で暖簾を切るように、颯爽とお店を出ていかはりました。

【おぼあちゃん、あんたは偉いお人やったなあ……、来ましたで、来よりましたがなあ】  
わたしは一人そう笑ったものです。

わたしは鉄さんを見ていると一人でいたあの男の子のことを時折思い出したものでした。どうしてはるやら…、良い一生を送ったであろうことを観音さんに祈るのでした。



鉄さんから送られ来る絵手紙の秘密、それはどのハガキにも一人の人間も描かれていなかったことだったのです。

人が住んでいる集落や、田畑が描かれたもの、そして山間の小径、冬の雪道…。どの画にも人が一人も描かれていなかったのです。寂しいんやろうなあ。苦しいんやろうなあ。なんて寂しさを抱えたお人なんやろう。わたしはそう泣いたものでした。

その後、鉄さんの画集が発売になると聞き、わたしはその画集を買わしてもらいましてんけどな、そりゃあもう、小さな字で説明が埋め尽くされていましたから松枝に読んでもらいました。すると…「立派な画や大作を描こうとは思わない。寂しいんだから寂しい画を描きたい」と鉄さんの言葉が載っていたのです。

「お義母さん、鉄さん寂しかったんですねえ」松枝がそう言葉にしました。  
「寂しかったんとちゃうねん、あの人は今でもずっと寂しいままやねん」そういうとわたしはまた声をあげてオイオイ泣いたものでした。

## その五 ことわり

なんですやろなあ、なんかねえ色んな声が聞こえてきますねん……。とおーくのほうなんですやろなあ。これまたおかしいな按配になってきましたなあ〜、たしか画を鑑ていたはずなんやけどなあ。ベンチに座らしてもろうて。

いろんな声が「お千代はん、お千代さん、お千代ちゃん」いうて呼んではることはわかりますねんけどお顔がみえへんよって。

なんやの、お里の声もしてるやないの……。フフッ、お里ちゃんあんたのことは声を聞いただけで分かるわ。お嫁さんたちには優しくしてやりや、せやないとあんた、閻魔さんにいじめられるで。

「お義母さん、お義母はん……。しっかりしてください、お義母はん……」松枝でっしゃろなあ、わたしのスポンのベルトを緩めようとしてもしてるんやろうけど、不器用なこでしてなあ。なんやベルトが取れしまへんのかいな……。松枝はん、あんまりほうして振ると、お腹の皮が擦れて痛いんですやろ……。あちゃあああ あかんかあ……。痛ないわあ。

ん？　なんて、松枝はん、なんていいはったん？　鉄さん？

こりゃあかん、あきまへん。おきにゃあ……。松枝はん、あんたうちのズボンどうし

てくれはりましたん、チャンとズボンはかせてますやろなあ。

「お千代さん……、わたしですよ、鉄です。画、観てくれましたか？ いい画でしたか。扉口の明かりはね千代さん。あれはあなたに貰った明かりなんですよ」

微かに見えていたはずの鉄さんの顔が次第に暗がりに堕ちてゆくと周りの声も聞こえんようになりましてん。

ほうしましたらな、目の前がぱあっと明るくなったとおもたら…、その光の中に観音さんがおわしてなあ、こういいよる。

「お千代、進むとき来たり」と。

「お迎えでしたんかあ……、

あゝ～そうそう～

風も吹くなり

雲も光るなり

生きている幸福は

波間の鷗の如く縹渺と漂ひ

生きている幸福は

あなたも知っている

私もよく知っている

花のいのちはみじかくて

苦しきことのみ多かれど

風も吹くなり 雲も光るなり。

ねえ観音さん、この詩はなあ奈良を愛し時おり遊びに来てはった女流作家の先生が詠んだ詩なんやけどね……、お里ちゃんのところには奈良に来るたびにフラフラと出入りしてはったらしいねんけど。なんや古道具屋が好きやちゅうて。そん度にお里が「友達が来た」いうて自慢してはってな。

禍福は糾える縄の如し。帳尻ちゅうことですなんやろねえ。

ところで観音様、訊き難いやけどね～あんさん幾つにならはったんかえ、えっ？ 満か数えかて……そな細かいこと気にしますかいな、あの世の理(ことわり)で」

了

夢殿「秋涙」令和六年版脱稿 令和六年二月九日 二万一七〇〇字



# 本編







---

夢殿『秋 涙』令和六年版

---

著 飛鳥世一

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---